「院内がん登録」全国集計および生存率集計結果の国民への伝え方を考える

国立研究開発法人　国立がん研究センター　がん対策研究所　がん登録センター　院内がん登録分析室
渡部　万里・奥山　絢子

1. はじめに

当室では、毎年がん診療実態を把握する資料として院内がん登録報告書を作成し公表している。一般の人にはこうした統計情報を理解することは難しい。JALグループから当室に出向した経緯から、ここでは市民目線で、国民ががんとの向き合い方を考える一助となるよう、全国集計・生存率集計結果を伝えていく公表活動について報告する。

2. 目的

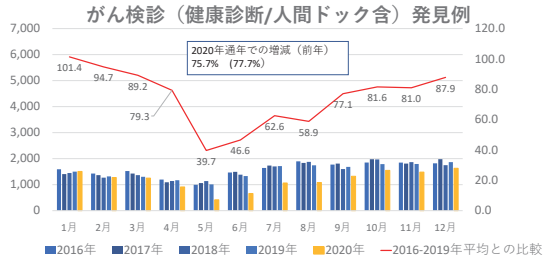
院内がん登録全国集計・生存率集計結果を、国民ががんとの向き合い方を考える一助とするには、どのようにメッセージを発信していく必要があるかを明らかにすること。

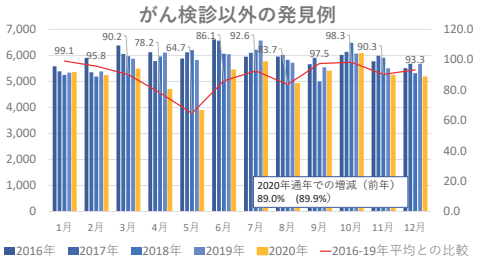
3. 活動と結果

❖【全国集計】：院内がん登録全国集計（2019・2020年）

説明資料ではマスコミ各社が「取り上げたい」と思う題材を「ポイント」として簡潔に示した。国民に事実を客観的に正確に伝えるために以下のような工夫をした。

・縦軸のスケールを揃えることで検診以外の例の減少影響も相当程度あることを伝える。
・報告書から月別傾向を抽出し、刻々と変わるコロナの影響を正しく伝える（例年並みに近づく）。





コロナ禍のがん診療は、国民が「知りたい」“旬”な情報であり、
40社を超えるテレビ・新聞等で報道された。
「がん検診だけでなく、症状があるときの適切な受診が必要であること」
検診・受診が不要不急には当たらないことを再度国民に周知できたのではないか。

❖【生存率集計】：院内がん登録生存率集計報告書10年生存率（2007・2008・2009年）、
5年生存率（2012～13・2013～14年）、3年生存率（2015年）

初の「院内がん登録10年生存率」では、2008年に診断されたがん患者の約半数が10年後も長期生存していることを強調し、「がん＝死」から「がんと共に生きる」時代であることを伝えることが重要と考えた。また現在治療中の患者・家族がいることを考え、希望を失わないような説明を検討した。

がんの10年生存率の報道を通して、長期生存が可能となっていることを伝えられたか。
NHKで詳細に説明する機会を得、NHKきょうの健康「ここが聞きたい！最新ニュース」
（https://www.nhk.jp/p/kyonokenko/ts/83KL2X1J32/episode/te/RYXX1ZL1QP/）内で
再度、国民にがんとの向き合い方ついて情報を伝えることができた。

さらに、患者が希望をもてる情報提供として、「サバイバー生存率」の説明方法を検討。
つらい治療を乗り越える原動力となるよう、いかに難解なサバイバー生存率を説明するか。
まず自分が理解できるように繰り返し研究者と議論し、言葉を考えた。

【初稿】
サバイバー生存率は、診断から一定年数後、生存している者（サバイバー）の、その後の生存率を示すものです。残念ながら全身状態が悪いなどがんと診断されてから早い段階で亡くなられる方が一定数おられます。そこで、一定期間を過ぎた時点からの生存率を算出したものがサバイバー生存率です。

→

【検討後】
残念ながら症状が重いなどがんと診断されてから早い段階で亡くなる方が含まれる相対生存率に対し、サバイバー生存率は、診断から年数が経過している方（サバイバー）の、その後の生存率を示すものです。

Take Home Message：国民に正確な情報を届けるために
◆忙しい記者に理解できるようポイントを簡潔に伝える
◆専門用語など難しい言葉は、一般の人の視点で理解ができるか確認する

4. 本活動に取り組んでの感想と今後の課題

異業種からこの業務を担当し、戸惑いは多々あった。人事交流でこの一年間勉強させていただいたことに感謝している。2人に1人はがんとなる時代、周囲でも罹患した話をしばしば耳にする。微力ではあるが、ここで学んだ「がん登録」「生存率」等を家族・友人・元職場同僚にわかりやすく説明し、何か起きた時には力になりたいと思っている。

「院内がん登録」について、まだまだ多くの人が知らないと考えられる。引き続き、メディアを活用しつつ、国民に向けて継続的に情報発信をしてく必要がある。